というほうが気楽だし、そういう風にやっている人が多いかなと思う。

Interviewer:（質問：HIV 予防啓発活動に対する印象）

参加者C：自己肯定感って最初に言ったが、知ってても行動に移せない原因は、対症療法的な手法では間に合わないのだと思う。そういう意味ではセクシュアリティに対してこどものときから肯定的になれる、気軽に語れるっていうような環境を作っていかないといけないような気がして、先進国の中でも唯一日本だけ HIV が増えていると言われているけれど、おそらく先進諸国の中でセクシュアルマイノリティの自己肯定感がこれだけ低かったりとか、性に対する抑圧が強いってのも日本にはあるのではないかと思う。

参加者F：正直子ども、小学生のときに初めてのセックスの授業のときに、大々的にまでとはいかないまでも、冊子の１ページにでも男子同士のセックスの作法とか、ちょこっとでも情報が触れられていたらよかったのになと思う。僕のイメージではコンドームは病気を予防するためのもので、セックスが始まる前からつけるもの、なんだけれども、そうでない人にとってはコンドームは避妊具であって男同士で使うものではない、今はまた状況は変わって来てるかもしれないけれども、子どもの時からゲイやセクシュアルマイノリティに対する広い知識がもっと広く教え込まれていれば、これから先の予防活動も変わっていくのかなという気がする。

Interviewer:（質問：禁忌とスティグマ）

参加者D：やっぱり HIV に関してはタブーなんじゃないのかな？相手のステータスを聞くのはタブーではないかな？一般の社会では相手のセクシュアリティを尋ねる事もタブーだし、HIV ステータスを尋ねる事もタブーだけれど、ゲイの友達同士の間でも HIV ステータスを尋ねる事はタブーだと思う。日本では、僕はそう思う。

参加者B：必要性が無い。エッチする時でも予防をちゃんとしている場合だったら言う必要も聞く必要も無いと思う。自分で宣伝する訳でもないのにね。タブーって言うよりも、言うべきでない事とでもいうのが。

参加者D：自分のステータスのどちらかによって変わってくると思う。僕の感覚としてはセックスする相手にはみんな同じ扱いをしている。全員が HIV を持っているという前提で接していますので。だから別に相手が進んでステータスを言ってくれても構わないし、言わなくても構わない。でも、言う人もおられる事がいる、とは聞いている、アメリカでの話ですけれども…聞かれる事もある。

参加者E：初心者の方が来られる僕の開催しているイベンドでは、HIV に感染したらこんなに恐い、というような問題は出さないようにしている。もし参加者の中に感染されている方がいらっしゃったら、そうした質問と答えを聞いて、パニックに陥る人もいるかもしれない。そういう気は使いますね. 禁忌というか気遣いというか。…（中略）…思い詰めてつめられてこられる方も多い。その人をさらに追いつめてしまうような事は言わないようにしよう、という気配りはしている。

参加者C：HIV に関して、こういう事は危ないとか、カミングアウトをしたノンケの友達に対しては言い易いのだけれども、ゲイのコミュニティの中にいる時って　言わずに済ませてしまっている自分がいるような気がして…それってなんだろう？　ゲイの方が、性に関してタブーを作るのを煙たがられそうな気がして、言いにくかったり言い出せなかったりする。

参加者F：リスクについて、わかってやってる人は少なからずいると僕は思う。正しい知識を把握した上でやっている人に関しては、やっぱりタブーではないですけれども、こちらから言うのは野暮というか。だけどほんとうにわかっているかどうかわからないですから、アレなのだが。

参加者B：オーラルセックスで HIV に感染した事例がオーストラリアで出た、と聞いたんで、そういうのは気をつけた方がいいんだろうねと僕が言ったら、スタッフが、「データではありません。感染するとかしないとかは私たちは言えないけれども、データで今まで統計でそういう結果は出ていません、という返事しか出来ない」という言われ方をして、んーなんかちょっと…。口って粘膜だし、相手のチンコくわえて、ヤバいのはヤバいんじゃないの？挿入でも入れる側にだって感染リスクはあるんだから、口の粘膜はなおさらなんじゃないか？って僕は理論的だと思って言ったんだけれども、向こうの返事は、データが無いから答えられない、という。

参加者D：実際僕が告知を受けたというか、…最近ではよく陽性の相談を受けることがあるんですけれども１年ちょっと前に、その人はアナルは一切やらなかったけれども、慢性の歯肉炎を持っているひとだった。その人が感染してしまった。その人はオーラルで感染したとしか考えられないと言っております。本人は。

Interviewer: 禁忌からオーラルの話に脱線してきました。禁忌のトピックは煮詰まって来たのかな。なのでお開きとしたいと思います。

（添付資料　2）ゲイ産業従事者　フォーカス・グループ・インタビュー　逐語録（抄録）

2009年1月25日

参加者A　ゲイ雑誌のライター。
参加者B　ゲイバーのマスター。
参加者C　ゲイ雑誌のライター。
参加者D　ゲイ雑誌のライター。
参加者E　元・ゲイバーのマスター。

Interviewer：（質問、お客、読者の年齢層と中心年代、地域）

参加者A：雑誌で私が直接ファンレターや感想をもらった印象では、最年少で18歳、最高齢は84歳でして、メインはやはり３０代ー４０代。

参加者B：ウチも下はハタチから上は７０代…少ないけれど、高齢者は。中心は３０代４０代。

参加者C：主に参加したメディアによると、ゲイ雑誌ではあるのですけれども、アカデミックな内容が前提の媒体だったので年齢層は２０代後半から４０代をターゲットにしていて…手に取る方は　版元の情報はあまり知らないのでどの辺の読者層があったのか判らないのですが、ターゲットはインテリ層、知的層。ゲイのみならず性だったりに興味のある。一般書店でも発売されていたので手に取られた女性も一般読者もいたのではないかと思う。

参加者D：私がゲイ雑誌に携わっていたのはだいぶ前なのだけれど、雑誌の読者は１０代から７０代くらいまでいらっしゃったと思うが、メインはやっぱり２０代３０代４０代なのかな。読者層はその当時はここまでインターネットが発達していなかったので、雑誌メインの読者、過渡期というか最後の時代に携わっていました。

参加者E：２０代３０代、４０代が少し、時々ガイジンのかたとかも。狭い店だったが、いろんな方が来店。オープン当時はもちろん携帯電話とか普及していなかった時代だったので雰囲気やコミュニケーションのしかたも今とはだいぶ違っていた時代。最後のほうはだいぶ携帯電話も普及してきだしたけれど、ちょうど時代の変わり目に店を経営をしていたのですね。

Interviewer：インターネットと携帯電話でお客や読者が変わった印象はあるか？

参加者D：雑誌は読まれなくなりましたね。

参加者A：出会いとエロのために、画像なり、そういうものがインターネットで手に入れば、あとは、まんがと小説の為に1500円、1800円という金額を、払う人は少なくなった。かつてあった手紙を出版社が仲介してやり取りする通信欄というのは、全ての雑誌でなくなったのかな？

Interviewer：バーではこれら二つのメディアは、お客の入り方や使い方に違いをもたらしたか？

参加者B：ちょうど僕が店を始める直前に、これらが盛り上がって来て。固まってから僕が店を始めたので、正直言って新宿二丁目にお客がどっと来なくなったと言われる時期で、（参加者Eに対して）、かなり違うのではないかと思うのですけれども（参加者Eあいづち）、そこで淘汰されて、それでも飲みにいくのを大事にしているというか面白いと思っている人達が僕の店に来てくれていると思うのですけれども。ただ、携帯電話ってのは面白いもので、ウチは比較的高い位置にあるので携帯がよく入る。だからしゃべりながら飲みながら携帯を手に持っているのが半分以上…７割くらい。飲みながら携帯を見てる、話しながら携帯を見てるってのが店内の電波が届き易い箇所で携帯をしている人ってのが圧倒的に多い。電話もそうだしメールもそうだし。まあ、いいんですけれども「何しに来てるの？」みたいな…（笑）気がしないでもない。ウチは比較的広いので、放っておかざるを得ないこともあるんですよ。一人でやっているときには洗い物していたりオーダー取ったりしている時とかに。ふっと気がつくとパッとぶわっとが並んで（笑）。あと、パソコン１代置いているが、それはそれほどでもないですけれども、チラと履歴を見たりすると、SNSを店からやってそこで約束をして店から出て、そうやって待ち合わせをする人もいるので。…ウチはそういう風にツールを置いているのでそれはそれでうまく利用してくれればと思って置いておりますが。変わりましたね。会話を楽しむだけではない。

Interviewer：（客層が）狭まった、選別されたという意味？

参加者B：お酒が好きだという人がまずあるでしょう。酒を飲みながら話したいという人はやっぱりいることはいるので、それはSNSなりインターネットなりチャットなり満足している人と、それだけでは、淘汰されても残った人というのがいると思います。その点は雑誌とは違うところではないか。要するにコミュニケーションをきちんと取りたいという意味で。もちろん携帯電話やインターネットでもコミュニケーションは取れるんだけれども、その、複数の人間と同時に顔を見てというのを望む人は少なからずいる、ただ、数は少なくなっているでしょう。ある限られたところにしか集まらないって言うような状況が生まれているんじゃないか？

Interviewer：（質問、ゲイ自認。お客様の好みのタイプの男性は？）…Dさんのとこの読者層の好みは「大きい人」？マッチョな人？

参加者D：そう。ありきたりの言葉で言えば体育会系、そういうのが多かった。というかそういう雑誌だったので。

参加者A：（自分が関わっている雑誌は参加者Dさんの関わった雑誌と）同じ媒体だと思う。（関わった）時期が違うだけで。基本はやっぱり体の大きい体育会系ガチムチ。スリムよりもふくよか…ふくよかという言葉は大き過ぎて当てはまりませんか…筋肉も脂肪もついているっていう、ある種大人の、30代40代50代ってのが、本来の「好みのタイプ」でしたね。

Interviewer：参加者Cさんのところはインテリ層が読者ターゲット層だったそうだが、読者の好みのタイプも知的な感じ？

参加者C：いや内容的にセクシュアルな要素というよりは、堅い読み物系の媒体だったので、だから嗜好性を求めて手に取るという雑誌ではなかった。そんな中でもグラビア要素を挟むと、スリムでそれでも筋肉がついているという、さわやか系で、そちらの媒体よりも若年層に寄るようなグラビアを掲載したりはしたのですが特殊な雑誌なので、そういう指向で手に取った読者はいなかったのでは無いかと思います。

Interviewer：参加者Bさんとこはスタッフがお客の出会いの手助けをしていますか？

参加者B：やらないですね、…好きじゃないんですよ。基本的に自分の店でできるってのは、ありがたいんですけれども、冗談半分で言えば、お客同士出来ちゃうとお店に来なくなるから（笑）。デキると家飲みとかが多くなったりする。他の人とコニュニケーションするよりは二人でコミュニケーションしたい時間が増えて来るから、飲みにいかなくなることは判っているし、なおかつそこでいざこざなんかが起きたりすると、会いたくないものだから、当然彼の行くところには行きたくなくなる。下手するとか他方だけ、いやふたりとも来なくなる。だからといって紹介しないということはないんですけれども、積極的に紹介することはないですね。…（中略）…たぶん時代なのかなあ？ガチムチと言われる体の大きい人の好み、…もともと体の大きい人好きはゲイの間に昔からあったのでしょうけれども、彼（参加者E）がやってる頃あたりからＳＧ系と言われて、今はガチムチと言われる、どんどんどんどん、極端になってる気がしますね。

Interviewer：（質問、読者顧客の出会いとセックス以外の、ゲイな交流場所はあるか）

参加者D：スポーツサークルとか？　自分の周りだけを見ると、わりといる。入っている、入っていた、複数のサークルを掛け持ちしている人が多い。

参加者C：インターネットで宣伝したりして、ブログ使ったり SNS 使ったりとか、っていうので、ネットを使って自分でモノ書いたり発表したり、それを使って交流している人ってのが自分の周りでは一定数いる。あと友達サークルみたいになっている交流があります。知る限りではそこでセックスは無いようだ。本を出している核になっている人をハブにしてつながっている人間関係というのが一個あるので、その人の日記にコメントすることによって知り合い同士にとかなるとか、そういう風なつながりが生まれている。

Interviewer：携帯と、出会いとセックスを引いたら雑誌を読まなくなるという話が出たが、出会いとセックス以外のゲイの交流は縮小していると思うか？それとも拡大していると思うか？

参加者B：広がっていると思う。インターネットを通して、スポーツもそうですし、音楽系のサークルはものすごい数ある。後はあらゆる…お茶の会とかアニメ好きとか旅行好きとか、細かいところではマラソンとか。そういうのは例えば SNS のコミュニティとかそういうもので、誰か興味を持った人の入っているコミュニティを覗いてみることによってそこにどんどん入っていくという、そうやって広がっているので、増えているんじゃないか？もう、ネットが無かった時代には想像できないくらい、きっと広がりはあると思う。…(中略)…今は身近になってますよね。地方の人はネットをみてお店に来て、昨日この会合に参加したんだけと、っていう話はすごいあるので、すごく変わったと思う。

参加者A：雑誌側から見てもそう。特にその変化は都市部もそうですけれども、地方の方がより変化が大きいようだ。地方都市ではバーが一件も無かったり、あっても１－２件しか無かったりして、その街の中の人達の出会いも情報も少なかったのが、いまは、都会と地方の情報格差と言う点では埋まった、…”望めば”だが。ある程度は情報は入る。望まなければ何も入ってこないけれど。昔だって、バーの扉を開けなければ何も始まらない（笑）。そういう意味では自分の部屋でネットをつなげるとか携帯を見る方が、敷居が低いとは言える。

参加者C：自分のことを隠しながら出来ますよね。べつにポンとコミュニティに入ったからと言って自分のことが判る訳じゃないですか。(Interviewer：ネットでは匿名であることは重要？）ある意味重要。(Interviewer：匿名であることは阻害要因でもあるのでしょうか？）昔あった文通欄の回送は絶対に自分の名前と住所を書かないと届かなかった。でも今は別に、サブアドレスとかメールアドレスはいくらでもとれるし、捨てることもできます。

Interviewer：人間関係に変化は起こったでしょうか？活動範囲は広がった一方で、簡単に捨てることもできるという話が出ましたが。

参加者B：すごく簡単に人間関係が。作るのも簡単だけれども、捨てるのも簡単になった。そんなにディープに行かないけれども、広範囲に広がっていくけれども簡単に切っちゃう。例えば二丁目とかのみ屋とかで知り合っ

て、一緒にいるのとは違う。匿名性はどんどん増えているだろうし。…（中略）…自分はずっと本名以外使うことがなかったものだから、少なくとも僕が飲みにいっていた 10 年 15 年くらい前よりは、今は名前をどう呼ぼうか？と聞くとハンドルネームのようなことしかいわないお客が多いような気がする。昔は実名とか実名でなくとも下の名前と名乗ったりしましたが、今は　アルファベットみたいな「Q です」（笑）みたいな。自分からこう…「B です」「Q です」…という人は前から比べると増えている気がする。きっとそれはインターネットというアレがひろがって…本名で検索されると出て来る可能性が高い人が比較的いると。昔はそういうことなかったじゃないですか。狭くなったので、判らないようにしてて、都合のいい部分だけ広がって、出会いが広がってヤレれば、ということは広がっているんだけれども、こと個人情報となると極端に狭くなる、狭くしているって人は多い気がする。

参加者E：20 年から 30 年前のバーもそうでしたよね。社章が見えているとママが「だめよ、ウラにして」（笑）。もう確実に本名はいわない。言っちゃダメ。あんたは犬に似てるから、極端にいえば犬子ちゃんよ、みたいな、もう本名まったく関係ないような。僕がやっていた 15 年とか 10 年くらい前になると、逆に本名が出てた時代。逆に今は昔に戻っているというか、人がまた増えている分クローズしている人が増えているってことですね、びっくりしちゃうなあ、それは。

Interviewer：（質問・お客のゲイ情報源）

参加者B、あれ？掲示板Qっていうの？ポータルQの掲示板Qってのがあるんですよ。かなりの人数が見ている。店で見ていると、ほんとうに 30 秒おきにぶわー、ってあがっている。ちょっと前のものを探そうと思うとものすごい遡らなければならない。ウチも何度かそこに名前が出ていたみたいだし。二日に 1 回くらいは俺の名前を見ますし。載ってたとか載ってないとか、自分が載っていることを知っている人もかなりいるし。（Interviewer：掲示板 Q ってどんな内容？）よく知らないんですけれどもね。「うちのお店にいた、どんな服を来てて、入り口のそばに何時くらいに座っていたあの人。僕はこれこれこういうタイプなんですけれどもどうでしょうか？」…それは銭湯だったりハッテン場だったり、地下鉄の駅だったり、っていうのが何秒おきにアップされる訳ですよ。それをみんな…目と目が合ったりするじゃないですか。で、自分も書こうと思いながらも、まずは自分のことが書かれていないか探しちゃう（笑）。…（中略）…「今日ジムに行ったんだけれども、今日ジムにいた人で僕のこと見ていた人はいないかな？と思って探したら…いた！とか」ね（笑）友達が指摘することもすごくあるんですよ。「これ、お前だよ」とかねえ。ほんとうによくその会話は出て来るので。かなり高いんじゃないのかな？「掲示板Q」。

参加者A：自分はそれを見ないのだが、僕も友達から指摘されたことがある。「お前、探されているよ」。どこそこの街のどのアパートの何階に住んでいる…下の名前が出てて（笑）…なんですけれども、（Interviewer：それ、ストーキングって言うんじゃないですか（笑））本人が連絡先を知っている人は連絡を下さいみたいな…。

参加者D：ほんとうに嫌がらせで使っている人とかいますよ。

参加者A：僕の場合は、メアドを無くした、昔からの知り合いなんですけれどもね。「お前、そんな使い方するな」って言いましたけれど。

参加者B：嫌がらせもあれば宣伝もあるみたいで。うちはそうでもないんですけれども、けっこう頻繁に載る店があるんですよ。ハッテン場とかあると、それを「ヤラセ」って…。自作自演。

参加者C：○○（掲示板）って今は見ている人って自分の周りにはいないかな？って気がする。最新情報はでやり取りしていますが。まあ、自分のネットワークがどこにあるのか？SNS-0にあるのかかSNS-Pにあるのかで　僕の場合は SNS-0 がいちばん反応がいいかな？その次はブログを書いても、それなりに反応はありますけれども。メディアとかを取っ払って言うと、やっぱり SNS とかは複数いろいろ出ていて、ヤリ目的だと昔は○○（サイト）のエリアボードとかで、ネットだとやってたりするんですけれども今は SNS-P だったり SNS-W だったり。そういうので出会いはかなりあるでしょう。ヤリ目的がメインの SNS もあります。

参加者D：ヤリ専門の SNS もありますよ。

Interviewer：雑誌の読者がいちばん見たい内容は？

参加者D：それが判っていたら雑誌を作っている人は…苦労しないでしょう（笑）。

参加者A：買ってるっていう人がいないですよね。

参加者E：捨てるのがめんどくさいっていうか。なんかこう…雑誌を捨てるのって別になるじゃないすか。そうすると「あんな本」みたいのが（笑）。モロじゃないですか。これ捨てるの大変だろうなー、そっちの面倒臭さが。

参加者E：あと写真やなにかが DVD みたいなのとタイアップしてるので、宣伝的写真が非常に多くなっててなんかこう、…わざわざ買わなくても別に情報としてはもうわかっているようなものがたくさん載っている、ということも、たぶん売れなくなったひとつの要因なのでしょうね。

参加者C：昔は後ろの広告ページがかなり…
参加者E：そうですよね。バーとか、うちも出していたし。
参加者C：今それっとどうなんでしょうね？
参加者A：もう、雑誌の広告と言えば、原稿つくってデザインして、出版される２ヶ月前くらいに中身が固まってしまう。ところが今は、お店もいろんなイベント、自分のお店のホームページとかマスターのブログとかあれば、もうそこで「来週こんなイベントしますよ」といえば、常連さんとか興味のある人はすぐにみる。それにマスター本人が管理できるから。…本人がちょっとパソコンが苦手ならパソコンが得意な常連さんに電話すれば、今日決まったことが今日のうちに告知できる　プロバイダーもサーバーによっては無料で、有料としても数千円で　雑誌でウン万円払って広告を出す意味がなくなってしまう。
Interviewer：参加者Cさんの知的な雑誌では、読者の求めるものも特徴があった？
参加者C：執筆陣が教授とか研究者みたいなひとが多かったので、わりと研究目的で学生さんが読んでいたりとか。権利に関すること、病気に関すること、文化に関すること、お金に関すること毎回テーマを変えて特集を組んでいた。

Interviewer：(質問。お客のグループとしての行動特性)
参加者B：うちって比較的、よく言われるんですけれども、モロ体育会系と言われるタイプと所謂文科系と言われるタイプに二分される。彼らがそれぞれ来るじゃないですか。ま、二つのグループだとして…かなり重なっている部分もあるんですよ。だけれども二つだとすると…かなり…こう、両隣同士　まったく相容れないのが如実にわかるシーンが多々ある(周辺くすくす笑い)。それは例えば HIV に関してもそうなんですけれども…はそんなでもないかな、例えばリブ系の話にものすごく食いついて来る人と極端に嫌がる人とがいて…体育会系だから嫌がる訳ではないんですけれども。行動パターンって言うのかな？ひとつの話題で盛り上がろうとするとそれをものすごく嫌がるというか。そうなり易い空間ではあるんですようちは。面白いなとはいつも思っているのだけれど。
Interviewer：体育会系と文科系、両者は二分される？
参加者B：ま、いつも思うんですけれども、極端に避ける人はやっぱり関心があるからなんだと思う。○○（掲示板）でリブたたきをする人っているわけでしょ？そういう人はリブにどこか関心があるからわざわざ書き込みをする訳。
Interviewer：体育会系文科系、リブ話題に食いつくのと回避するのは相関がある？
参加者B：いや、必ずしもそうだと思わない。７対３で、文科系の７割はリブの話題に食いつくかもしれないが。それはそうではない気がする。ただ、なんて言うのかな？すごくイヤな言い方になるんですけれども、体育会系の人は見た目を気にしてトレーニングをする人って比較的多いじゃないですか。そういうことばっかりにしか頭を使わないのねバカって言う風に思っている人達もいるんだけれども…。まったくそういうことに興味がない訳ではないのだけれども、そういうことに勢力を注がないと。もうちょっと知的な部分にエネルギーを注ぎましょ…っていうひとが文科系だとすると、話す内容も変わってくる訳じゃないですか当然。だから…その辺は非常にあるかもしれない。どっちがいい悪いは無いんだけれども
Interviewer：先ほど病気というトピックがお客のグループを二分するかもしれないものとして例示されかけましたが。
参加者B：今日ちょっと呼ばれて思ったのは、バーの中で HIV のことってのはかなりタブーなのではないかと。話はね。…というのは感染者の人がいるかもしれないと思って話さない人は多々いるだろうし、やっぱり楽しい話じゃないじゃないですか。で、リラックスして話を楽しみに来ているのに、なんでそんな話をしなきゃなんないの？と思う人は多い気がする。バーという場所は。店の規模にもよるのですけれども、クラブとかがはやっていたりすると、クラブ文化みたいなのをを背負ってバーに来ている人は…うちの店はキャパが広いので…30 代とかはそういう人が多いので、関心は持っているんだろうけれども会話にはならないですよね。HIV は。
Interviewer：クラブ文化って具体的に定義できますか？クラブ文化の中で、お客や僕たちはゲイ一般はどういう行動様式を取るのでしょうか？
参加者C：クラブではそもそも、面と向かってしゃべるというスタイルを取らない。踊って、お酒飲んで、下らない話をして帰るという形なので、トピックが出て会話をする感じではない。だから例えばそういうお店とか、僕の友達は大学の時からの付き合いでクラブに行ったり昼間も会っているという友達関係も多いが、昼間話す内容をクラブで話すかっていうとしないですよね。
参加者C：昔は２丁目にあるクラブと、いくつか、行くところは決まっていましたけれども、それがもう例えば新宿の普通の箱だったりとかでもイベントやったりとか。だから数はものすごく増えましたね。
参加者D：クラブ好きな人ってのは、別にゲイのやつだから行くって訳じゃないですよね。クラブ好きだから、好きな人が廻しているから行く、ていうことであって、ゲイであろうと無かろうとあんまり関係ないと思いま

すね。

Interviewer：ゲイナイトというのももう無い？

参加者D：それはありますよ、それはそれで。それは踊りにいくというよりも出会いにいく。あわよくばヤッちゃおう。そういう理由であって。

Interviewer：クラブに行く人のいちばんの動機付けは、好きな DJ が廻しているから？いつもの仲間に会えるから？

参加者B：…圧倒的に変っていますよね。今は、音っていうものに対してものすごく…「あの音がいいから」っていうのが…お店でも話していますけれども、「あの音がいい」てのは、僕はもうわからないのね。だけど「あの DJ が廻すあの音ってのがすごくいいんだよね」…だからクスリとかが、わからないですけれども、今のクラブの中でどのくらいドラッグが出回っているのかはわからないですけれど　少なくとも僕らが行ってた 15 年前 20 年前に比べると、もうそれは、ものすごい差があると思いますよ。クスリを使っているという。

Interviewer：二つ出て来たな。ひとつはクラブに行く大きな動機が「音がいい」、それと「ドラッグ」。行く人もドラッグを期待している？

参加者B：…そういうひとも一部いるみたいですね。僕が聞いたのは…とにかく、僕はね、ドラッグを使うのは楽しいセックスをするためなのかなと言う風に思っていたけれども、セックスも別にしなくてもいいんだけれども、音を感じるためにっていうひとがかなりいるらしい。聞くと。いちばん最初はセックスで始まっているのかもしれませんが。僕はドラッグイコールセックスだと思っていたが意外とそうでもなかったりする。それは後で気持ちよくなってアフターでセックスに流れ込んでいく人はいるのだろうが。軽いものから今は「合法」と呼ばれるものがあるかどうかはわからないですけれども、幅広くあるんじゃいですか？いっぱい。で、「実はここだけの話なんだけれども」といいながら話すくらいだから、比較的軽い気持ちでやっている人多いですよね。そんなになんか大変なことだとは思っていない「別に迷惑をかけている訳じゃないじゃない？」とか。手に入り易いのではないか？

Interviewer：お客さん読者さんの、セックスとドラッグとのつき合い方など、ご存知でしたら教えてください。

参加者A：脱法ドラッグを未だに販売しているヤリ部屋もありますね。それが本当に効くかどうかはわからないが、「タチサプリ」「ウケサプリ」がセットになって入場料いくらみたいな場所もあるし。そういうところでそういうサプリを飲んで物足りなくなった人が本格的な方へ進んでしまう、という例もあって。よく聞く話で、どこそこのヤリ部屋の周りには警察が張り込んでるよ、とか。出て来ると職質受けるとか、ある日バッと踏み込まれて、そこにいた全員が尿検査でおしっこ取られたとか。そういうのは実際にありますし。知り合いのパートナーがほんとうに捕まったりもしているし。

Interviewer：皆さん…いや、皆さんのお客さんは、ドラッグ体験者は、ドラッグを使うとセックスの場面でリスキーになる？

参加者B：僕は何人か知っているんですけれども、やったことがある人、やっていた人、やっている人含めて。比較的「自分は大丈夫だ、捕まらない」も含めて、「そんなに大した中毒にはなっていないから大丈夫だ」って言う風にいっている人が多い。自覚症状が無いというか、あるというか。「自分は自覚しているのでこれくらいだから大丈夫だ。いつでも止められるし」という。…やめてないじゃん（笑）。もちろん過度にはまって非常に苦しんで逃れられないでいる人もいるし。　ほとんどそういう人は最初はセックスのパートナーからやってみないと言われて、初めて、そういう風になっちゃう。やっぱり、訳わかんなくなっちゃうって言うことだから、効くんですよ。

Interviewer：（質問）客が一人できた場合と仲間同士で来た場合に動きが違うことはあるか？

参加者B：人によるんじゃないですかね。性格による。一人できて黙って人の話を聞いて帰る人もいれば、常に誰かとの会話を楽しみたいと思う人もいるし。ただ、必ず一人はいつも一人だし、必ず複数で来る人は複数で来ますね（笑）。

Interviewer：印刷媒体組は回答難しいでしょうか？

参加者C：まったく読者のことは正直…。友達とかのレベルでどうだということしか言えない。メディアだからこういう読者層でこういう行動だとかは行動特性だとかは言えないですね。自分自身がそういう傾向に当てはまりますね。ただまあ、自分の中のひとつのルールとしては、強制的にあわせなければならない友達関係というのは自分から意図的に排除して、自分の気持ちのいい集団の中にしかいない　ピンのときで行動するときには好き勝手むしろ集団で行動規範がきっちりしている方が僕はしっかりしていますね。自分の意に反して行動を強制されるというような場面は無いですね。…例えばその、みんなが生でやっているみたいな話題になったときに、自分も自分も、とか言ったりすることも無いですね。

Interviewer：「みんな生でやっているから僕も生でやらなければならない」という仮説は実際に起こっているのでしょうか？

参加者C：「SNS-W」ていう SNS はすごい世界だなあと。完全ヤリ目的の SNS なのだが、みんな日記に、やって、ハメ撮りをした写真を載っけて報告している。で、そのためにセックスをしているような人が、けっこう多いんじゃないんじゃないかなと思う。例えば日記で「今日はハメ撮りできませんでしたごめんなさい」とか書いてあって…。別にね、それ、したいんなら構わないんだけれども、見せるためにやってるのかよお前！みたいな。後、見てて面白いなあと思ったのは、さっきもドラッグの話が出ましたけれども、「キメ生」コミュニティってのがありまして、SNS-W というみんなが入っているいちばん大きなコミュニティが１３０００人くらいいて、「キメ生」には４００〜５００人いて。そこをみると今までキメる、ということは意識もしていなかったけれども「ここで手に入ります」みたいなことを言われれば、飛ぶとショッピングサイトに飛べる。すごい情報には近くなっちゃっているなあ、と。

Interviewer：プレッシャーもあるけれど、情報も入る。

参加者C：興味があるとそのままそこにダイレクトに行けちゃうので、興味の幅が広がってしまうかな、と。

参加者B：そういうコミュニティがあるのですね、「キメナマ」という。

参加者C：あるんです。「キメナマ」っていう、自分はナマ派です、という。そもそも SNS-W でセックスポジションを書くときに「ウケ・ナマ」とか「ウケ・セーフ」というのが選択の中にある。そこで、自分はナマっていれている人ってけっこういて…、ナマ画像をちゃんと貼っていくコミュニティっていうのが…ある。

参加者D：なんか人によっては、ナマ OK の人とじゃないとつながりませんよ。というひともいますよね。

参加者C：そう。逆も然りですが。

参加者D：ナマとか言ってる人はダメ。でもこの人とつながりたい、知り合いになりたいなと思ったときにその相手が生とか言ってる人はダメですよとかいってたら、どうしても、って言う人だったら流される人もいるかもしれない。

参加者B：SNS はどんな人がいるのか、わからない訳でしょ？きっと。そうするとさ、自分の友達とか自分がいいなと思っている人がそこに入っているか選別できない訳ですよね。SNS の場合は比較的わかり易いので、ええっ？この人ったらこんなコミュニティに入っているの？ちょっとパスっていう…別に性的なものでなくてもね、そういう選別があったりしますよ僕は。例えばこの人と出会いたいな、すごくタイプタイプと思っているけれどもその人の入っているコミュニティを見ると「ええっ？これかよ？じゃあ」（一同、笑）…っていう選択肢はとれるけれども、エッチ系ってのは顔出しとか個人が特定できないじゃないですか。

参加者C：たぶん逆のうごきですよね。特定の個人がいて、その人のコミュニティを見て「あ、違う」という風に思うか、コミュニティを見て「あ、自分と重なってきた」、で、絞り込んでって、…じゃあ、ヤリ…逢いましょう、というような話になったりとか。エロ系のだと、カウント・足跡機能とかあるじゃないですか。過激な画像を載っけてるとカウントが稼げるみたいな感じで…結構そういうのを意識して、毎日のように過去画像を…。過激画像をあげたほうが人気者になれるという構造があるので、ちょっとそれがすごい過剰だなと。（Interviewer：これは立派なグループ行動規範ですよね）見てると、あ、こいつ、もしかして…と、本当の知り合いを見つけちゃったりするんですけれども（一同くすくす笑い）夜と昼とは別行動なのだな、と。

Interviewer：（次の質問、禁忌について、前に参加者Eさんの発言を引用）

参加者E：個人的には、店をやっているときには、相談、ないしは、告知されることはありましたけれども、通常営業で他にお客さんがいらっしゃるときには、比較的禁句というか、あまりそういうことにはならなかったかな。二人きりになると言われるということは非常に多かった。「教えなくていいよ…！みたいな」（一同笑）。でも、やっぱり僕らに教えてくれることによって僕らは情報をたくさん持っているから、「じゃあ、この人に相談してみれば？」とかいうのが、すごくいい情報になっていたのでしょうね。…異常に教えてもらいますよね、僕個人的に。

参加者E：他にお客がいると言わないですね。ただ、中のマスターってなると、別みたいで。これは私個人でなくても、他のお店のマスターも…

参加者B：なんかね、深夜遅くなって、人が少なくなって来るとやっぱり。電話なんかもそうですけれども、ましてお酒なんか入ると、そういう気持ちになって来るのでしょう。親密な感じになっていって…。別に HIV に限らず、うつの人って最近多いじゃないですか。うつの話ってよく出る。みんな結構 HIV と違ってうつの人って比較的話すし、自分はうつだって。プチうつみたいなことも含めて。病院に通っている、薬をもらっているっていう話題はびっくりするくらい。５人７人くらい周りに人がいても、「あ、自分も自分も」みたいな。

Interviewer：精神科領域の話はあまりタブーではない？

参加者B：若い子に最近よく教えられたり怒られたりする。「こういう言い方をあのお客さんにするでしょ。その人うつだから、うつの人の場合はこういうこと言っちゃいけないとか。ま、僕もうつだし、先生からもそういう風に聞いているので、そういう言い方は絶対にタブーですよ」みたいなことを教えられたりする。

参加者E：肉体的なことは、やっぱり言わなかったですよ、肥ってるとか痩せてるとか、今日顔色悪いわね、と

か。たとえ顔色悪くても…うわぁ酒なんか飲める状況じゃねえじゃんと思っても、そういうことは一切言わなかった。言われるとなんかそういう気分になるじゃないですか？「マスター、今日風邪っぽくない？」って言われるだけでも、こっちもなんか、ええええ？って気分になったので、そういうことは言わないように。特に肥った痩せたってのは言わないようには…。

Interviewer：肥った痩せたは、健康状況という意味じゃないですよね？

参加者E：いや、やっぱり HIV とかも含めて、何か、急激に痩せて来たりとか。いちばん念頭にあるのは健康のこと。モテるモテないではなく。

参加者C：病気の話を、媒体の特集で取り上げたことがあって。それは一般的なゲイ雑誌だとタブーだから、あえてちゃんとやろう、という感じで。症状が出たちんこの写真なんかも載っけながら、HIV の最新情報みたいなのを載っけたりとかしたけれども、それを求めていた読者からはいい反応があったと聞いている。で、別の媒体ですが、だいぶ前なのですが生とかリスキーセックスの特集をあるゲイ雑誌がやったときに、この特集をこの雑誌で取り上げちゃいけないんじゃないの？？という議論を一回したことがあって。その辺がもしタブーがあるとしたらひとつリスキーセックスって言う話と、病気の話…媒体によってですよね。

Interviewer：雑誌によってそれらはタブーであったり無かったり、知的系の雑誌はむしろ歓迎される？

参加者C：後はそう、エロ目的が無い媒体は受け入れられる。エロを期待される雑誌の場合それは萎えさせるコンテンツになっていけないって言う、話があったんだけれども、逆にその上にリスキーな行為ばかり振って、煽動するのも良くないんじゃないか。焚き付ける可能性もあるから、エロコンテンツがある雑誌だと、リスキーな内容は行わない方がいいんじゃないの？という話は、一回議論になりました。

Interviewer：ガチムチ雑誌担当の参加者Dさん参加者Aさんは、リスキーセックス系、病気予防系のコンテンツを出すのに賛否両論ありましたか？

参加者A：いえ、賛否も何もあの…私の関わっている雑誌は創刊以来 HIV のページがずっとありますから。だからその常にエロと現実のリスクの情報は、ひとつの本に載ってはいるのですが、どこを読むかは読者次第なので。例えば小説をまるで読まない、グラビアとコミックしか読まない人がいるように、HIV に関するページはまるで飛ばすと、いうのも。発信はしているみたいですが。

参加者D：それが雑誌のいいところじゃないでしょうか？バーではお店の広さにもよりますけれども、その話をしてて、聞きたくない人にも聞こえちゃう訳でしょう？でも雑誌の場合は一人で読むものですから、イヤなところは飛ばせばいい。そのへんは媒体が違うのでいっしょくたに語れるものではない。タブーってのが雑誌にはそもそも無いんじゃないですか？それはモロ出しは NG とか、法律的なタブーはありますけれども、「雑誌」なので「雑」なので、何が載っていても、どんなコンテンツが載っていてもよい訳で。

Interviewer：(HIV の情報ソースに関する質問、お客に質問されることがあるか。もっとも情報に詳しい人はどんな人達か)

参加者E：相談はされてました。

Interviewer：お客からは参加者Eはソースだと思われていたということですね。それはなぜだとお考えですか？

参加者B：いろんな人がお店に来るからだと思う。

参加者E：自分がいちばん最初にお店を持ったときにその、ゲイ雑誌Rというゲイ雑誌の編集長であるもと編集長Rさんと親しくしてもらっていたので、当時もうもとRさんは自分が感染しているということを僕らに教えてくれていましたので、何かあればもとRさんに相談しよう、というのがあったので、お客さんをもとRさんに紹介したりとか、ということも、当時からしていたので。

参加者E：「Rさん聞いて！」僕わからなかったので、その最初の病院の選択によってえらく違うってことも聞いていたので、すごく大きいと聞いていました。決めるのは本人ですけれども、サブの意見としてもRさんの意見も聞いてみた方がいいよ、とアドバイスしたことがあります。

Interviewer：Rさんが情報源として認知されている理由は、ではなぜか？アドボカシーの人だから？治療生活が長いからか？感染者として公に出ている方だから？

参加者E：当時そんなにいなかったので、相談する人自体、だからその、もちろん本としては出ていましたけれども、実際にいろんな今みたいに感染者同士のコミュニケーションがとれる場所など無かったので、そういう実際の人の話を聞いてどういう治療をしているかって言うことを通じてだと思うけれども。今はもう山のようにある。

Interviewer：空間を変えて、SNS やネットとかで情報源として期待されている人物、ブロガーとかコミュニティ管理者はいるか？

参加者C：こないだ話題になってたのは、みんな「診療所Sに行く」とかって話を。検査機関としては大きいかな、って…。

参加者B：あとコミュニティセンターだね。やっぱり、二丁目の中にある。積極的にお店を回って、コンドーム

配っているっていう…。センターのチラシだとかコンドームをおくというのを、別に全然興味の無い人間もトイレに入ったら、それを目にするという意味では…ありますよね。僕はこれはすごい力だと思う。

参加者B：昔でいうと「休刊雑誌T」という雑誌があって、その出版人Tさん。あの辺りが AIDS110 番と銘打って表紙に…。ああいうのが最初だったのかな。あの頃に比べると情報は増えたし。すごかったですよね今考えると当時、あの雑誌くらいしか無かった訳じゃないですか。

Interviewer：休刊雑誌Tの表紙の AIDS100 番と、コミュニティセンターからのコンドームは、みなさん今は興味はなくとも「何かあったらここに」という記憶に焼きついている…。「診療所S」はどうやって皆さん知ったのでしょうか？

参加者C：クチコミじゃないでしょうか？あと、お店とかに行ってもポスターが貼ってあって、中に名刺が入っている。そういうので。知ってるのかな？と。

Interviewer：他にキーパーソンになっている人はいるでしょうか？

参加者A：地方とか行くと、ポータルUの同性愛のページを作っているかた、過去は編集者Uさん、今は編集者Vさん。やっぱり、あの辺の人達の知名度が高いですね。

Interviewer：相談先としても地方のかたに認知されているのかな？メールとかしちゃうのかな？Vさんに。

参加者D：「まずその人在りき」というよりも、グーグルとかで検索をして、STD,HIV,ゲイとかって入れて、その人に行き着くっていう感じなんだろうな。その人に何かあったら相談するっていうのではなく、まずなんか自分に症状が出て来て、それで検索した結果その人物が出て来て、その人のバックボーンを読んでみたら、この人にだったら相談してみようかな？というひとが大半なんじゃないかな？僕らの中で人物がそんなにあがってこない、ということは、そんなに傑出した人物が今いるとは思えないですよね

参加者B：すごく面白いなと最近思ったのは、比較的ウチに来るお客さんで、でも、ゲイバーにはほとんど行かない。で、既婚者。ハッテン場にはものすごく行く。ゲイの友達は持たない。深夜に来たりするだけれども。そういう人はインターネットはやる訳ですよ。インターネットでいろんな人と知り合ってセックスはやる。だけどその知り合う相手が既婚者だったり独身だったりする訳ですけれども、要するにかなりクローゼットで友達は持たない、持ちたくないんですよ。徒党を組むのはイヤだし。気もちいいいセックスができればいいんですよ。ゲイとしてのプライドを持たないし持ちたくもないし。一生クローゼットの中で楽しく幸せに、だからゲイ・リベレーションのムーブメントとかおこると不愉快になるんですよ、彼。そういう人ってのはかなりいて実は。それはもう眠っている訳ですよね。結婚してたりして普通の顔して社内で、かなりいい会社でいい役職に就いたりして。ただ、コソコソっとネットで知り合ったのとセックスやりまくったりするひとがけっこう多いらしいんですよ。で、そういう人がやっぱり HIV になる。だけども、それを調べるんだけれども誰かに相談しようと思っても、その人がゲイの有名人とかだったりすると、この人とつながってしまうとなんか自分の情報が漏れちゃうかもしれないから、つながらないようにする。そうすると、あんまりゲイが行ってない病院を探す。で、当然そこで、「あなたは同性と性的接触をしましたか？」と聞かれても「したことありません」という、違う情報を答えて治療を受けようとする人もかなりいると聞いて僕はびっくりしたんですけれども、現実にはあると思う。いつも思うんですけれども、バーとかに出入りしている人間は本当にごく一部で、そうではなくて、まったく「ゲイ」という言葉すら口にしたことも無くて、だけれども男とだけセックスをして…という人のほうが…ゲイの中では８割とか占めるんじゃないですかね。そうすると問題はものすごく根深いし。それは止めることはもうできないかもしれないというくらいの…。それは社会がそうさせている部分もありますけれども。だけど、それになんか甘んじているというか、それでいいと思わせる風潮が日本にはありますよね。すごく差別されている訳じゃないし、普通に生活できる訳じゃないですか。何とか楽しく。楽しいセックスができればいいんですよ彼らにとっては。ゲイの友達は要らないしノンケの友達がいっぱいいるし。そういう人、すごいいるんじゃないですか。なんかね、僕はそれがわかるような気もする。というか、自分がそこにいたかもしれないし。たまたまこの世界に僕は脚を踏み入れたからこういう生活をしてるし、エンジョイもしているけれども、じゃあ、果たしてそういう生活していたからエンジョイできなかったのか人生を？というと、そうでないような気がしないでもないところが恐いですよね。

(添付資料　3)　地方　フォーカス・グループ・インタビュー　逐語録　(抄録)
2009年2月1日

参加者A　中四国コミュニティ活動家（予防啓発系）、元・ゲイバーのマスター。E
参加者B　中四国ゲイバーのマスター　Y
参加者C　中四国コミュニティ活動家（若者向け）　S
参加者D　中四国コミュニティ活動家、大学職員。　H
参加者E　中四国コミュニティ活動家（予防啓発系）

Interviewer：参加者Aさんの活動であるクラブイベント・公園イベントはこの地域一般で年齢限定はない？
参加者A：クラブイベントは酒が出るため未成年は参加不可。　性に旺盛な若年層＝２０代がほとんどだと思う。特色としては地方でゲイオンリーというわけにはいかない。予防啓発するうえで。　あくまでMSMも含めヘテロの人も含んだ広い意味での啓発活動になる。　他のアウトリーチとしてゲイバーにアクセスする。
Interviewer：Bさんはゲイバーにお務めで　年齢層は？
参加者B：もうバラバラ。一番若くて中学生もいた。上だと７０超えていたり。
Interviewer：(質問) クライアントのゲイ自認と好みについて。クライアントの好みの男性はどんなタイプが多いか？いまどういった男性がクライアントの中で好まれるか。
参加者A：僕の周りではガチムチ系。短髪。が割合からすれば多い。　でもけっこういろんなタイプ、細身好きとかジャニ系が好きとかいろいろ。
Interviewer：他の方は？
参加者B：人それぞれタイプがあるけれど、基本的にはガッチリが好きな人が多い。
Interviewer：ユースは？
参加者C：いや、そういうタイプの話をしない。個人的に話す人を聞いてもバラバラ。
Interviewer：Dさんのところの学生は？
参加者D：カミングアウトしているわけではないのではっきりしないが、僕は他のメンバーとは違う県、しかも田舎に住んでいるので、ガチムチに偏っている感じはしない。
Interviewer：男性とセックスする男性が全員自分がゲイだと自認しているとは限らないが、みなさんのクライアントさんは自分をゲイだと言っていますか？
参加者A：アウトリーチで野外ハッテン場に行くことがあるが、そこで女装の方を相手にする男性がいる。彼らはゲイという自認がない人がほとんど。自分がゲイということはもちろん違うし、男とセックスしている自覚もない。不思議なこと。女装は女装、男手も女でもない別物、という感覚で行為をしている。
Interviewer：女性とも思っていない？
参加者A：女装という別のカテゴリー、セクシャリティ。
Interviewer：そういう人は自分をゲイだとは思っていない？
参加者A：はい、だからコンドームが何故必要なのか、避妊用具でしょという感覚。女装とセックスしても性感染症にかかるという意識がない。
Sub Interviewer：　アウトリーチで話をすることがある？　結婚しているかわかるか？
参加者A：結婚している人が印象では８～９割。
Sub Interviewer：野外ハッテン場での情報というのは掲示板とかでやりとりしているのか。ゲイの自認がないひとでもゲイのサイトを見るのか。
参加者A：どうも女装サイトがあるようだ。アクセスしたことはないけれど。そこで情報を得て、主に週末に時間帯が決まっていて集まる感じ。システムができあがっている感じがする。
Interviewer：女装好きの間で情報源ができあがっている？
参加者A：そんな感じです。
Interviewer：ゲイの自認に戻りますが、バーのお客さん、ユース、それぞれゲイという認識の仕方に関してはどうですか。　自分をゲイと思っているか。結婚などについては？
参加者B：ゲイバーなので個人的なことはシークレット。本人が言わない限り。
参加者A：バーに来た時点でゲイと扱う。
参加者B：そうですね。
参加者C：我々の活動はゲイはゲイと限られた場でなくオールジャンル、高校生だと学校に行ってのことが多いのでゲイですかと尋ねることもない。限定した話ではないので自認という話も出ない。
参加者D：授業での取り扱い方というのはゲイやレズビアンの学生だけに話をするするわけではない。ヘテロの学生に「違うセクシュアリティの人もいる」ということを話すと同時にセクマイの学生がいることを前提に、「ア

ナタだけじゃないから、それでOKだから」という話をする。　下手をするとカミングアウトを強いることになる。とくにヘテロの学生は「自分は違うけど」と話ができるがゲイはできない。だからむしろ聞かない・言わないことも大切なんだよという話になる。　ヘテロの学生がみんな「自分は違います」と言うと（ゲイの学生を？）話にならなくなる。学生が「先生はゲイなの？」と尋ねてきた時も「どうして聞くの？　それを関係なく考えてみよう」という感じ。研究室にレインボーフラッグやゲイ雑誌も置いてあるから、それを見て話をする学生は「ゲイかも、バイかも」という前提で来るのでは。だからあえて突っ込まない。言わないから話したかったら話してね。という感じ。言うとやりにくくなる面もあるので。　場合によってはこちらがカミングアウトしたほうがいい場合はその学生個人にすることはあるが、全体にすることはない。

（参加者E入場）

Interviewer：クライアントの情報源について質問。クライアントは情報源として何を最も利用していますか？

参加者A：やはり一番はネットではないかな。

Interviewer：ネットの形態も刻々と変わっているが今は？

参加者A：やはり携帯でしょう。

参加者D：PCを必ずしも持てるわけではなので、恐らく個人で持てるのは携帯だろうと想像できる。　学生の情報の取り方を見ていると携帯サイトしか見ていないと思わせることがある。　使う時はPCを使うけれども主として使うのは携帯端末だと思う。　親元にいれば自分のPCでなければ危険でしょ。アクセスするのは。

参加者A：とくに携帯サイトの場合はいわゆるセックスネットワーク作り。　コミュニケーションをとる必要がない。必要最小限の情報で足りる。　その面で携帯のほうがゲイにとって使いやすいのではないか。

Interviewer：それは自分のプロフィール・情報を出したくないということもありますか。

参加者A：それはあると思う。必要最小限のことでいい。　ましてや普通に家に帰ってPCということになると面倒。　自分で持っている携帯で、仕事中でもできる、となることは想像がつく。

Interviewer：情報のメインとしては出会いとセックス目的ですかね。

参加者A：そうですね。

Interviewer：Dさんの話で「情報元は携帯だな」と感じる部分は？

参加者D：直接聞いてはいないが、レポートなどを見ているとパソコンを使うのは最低限のようだなと感じる。情報の件でいえば地方は人間が少ない、情報が少ないから都会に比べると少ない情報でも個人が特定される恐れがある。

参加者B：僕もそれは思います。

参加者A：あるサイトでは携帯の機種名が表示される。それにプロフなどが出ると「あの人かな」と思い当たってしまう。だから極力載せる時にはバレたくない心理が働くのでは。　時々プロフをコロッと変えたりする子がいるが、書き込みの内容で「その子だろうな」と想像がつく。絶対数が少ないから。

参加者B：ゲイの絶対数が少ないので、いちど出てしまうと一気に拡がってしまう。

Interviewer：拡がるのは損害が大きいですよね。いったい何が起きる？　何を心配する？

参加者A：バッシングが起きることもある。嫌がらせの書き込みもなきにしもあらず。

Interviewer：けっこう身近な脅威？

参加者A：そうですね。それにストーカー行為とか。最近もありましたし。

Interviewer：（質問）情報収集としては皆さん何を調べているか？　イベント、学術、保健所の検査などは？　そういう情報源としてネットなり印刷物なりということはやっているか？

参加者A：僕は発信する側にいるので、チェックはします。出会い系サイトで薬物のことをチェックしたり。

Interviewer：出会い系で薬物チェックとは、どれくらい広まっているかとか？

参加者A：いえ書き込みがあることで健康被害に遭うとか詐欺に遭うとか。そういうことをサイト管理者に連絡を入れるためにチェックをしている。

Interviewer：カキコによる健康被害とは？

参加者A：ナマでやろうとか、そういうものですね。そういったことが大々的に出回ったりするとそれまで興味の無かった子までやってみようとアクセスすることになる。

Interviewer：ドラッグなどは書き込まれることで拡がっている実感はありますか？

参加者A：ありますね。

Interviewer：ドラッグは予防の中で重要なファクターになると思われるのですが、クライアントさんの間で使った話は聞きますか？　範囲としては現時点で非合法のものということで。メタンフェタミン、大麻、ゴメオとか。

参加者A：マリファナなどは以前から違法だから「やりました」と言う人はまずいない。　ゲイの間で流行ったゴメオ、ラッシュなどを経験したと言う子はけっこういる。

Interviewer：それらは今は違法ですから、今では誰も何も言わない？

参加者A：けっこういますよ。
参加者B：バーではまったくいない。
Interviewer：情報の集め方に世代差や時代の変化はありますか。
参加者D：私やAさんは古い世代だから雑誌を当たり前のように買っていたけれど、今の子たちは買っている様子がない。　東京とかなら２丁目や上野で普通に買えるけれど、こっちに住んでからは仕事の関係もあって地元では買えなくなった。
参加者A：以前は本屋で山積みになっていたけれど今は半分以下になった。以前なら販売初日に５０センチくらい積んであったのが、今はその半分か三分の一しか入っていない。なのにそれも売れていない。
Interviewer：大都市だと買うのは簡単だがこの地域だと面が割れるというファクターが働いて、敷居が高い？
参加者D：はい。地方だから普通の書店に置いてあるのはわかっていても買うことはできない。　しかも本屋がチェーン化していて、チェーンの本屋は置かない。　雑誌という媒体に対する信頼性と、それへのアクセスという２つのファクターがある。
参加者C：個人的にはネットが身近でなかった時は雑誌に頼らざるを得なかった。危険性があったから。　ネットが身近になると雑誌を買わなくても済む。雑誌の情報はネットに載っている。また雑誌をネットで買えるので本屋で買わなくなった。　雑誌を買ったよという話を周りで見聞きしなくなった。袋にパックされて立ち読みできなくなったから買ったと聞いたことはあるが。
Interviewer：リニューアルで敷居が低くなったのかな。版型が一般の雑誌と同じになったから？
参加者C：そうですね、それはあります。見た目がそんなにゲイゲイしくないし。
Interviewer：中身は魅力ありますか？　買って読む価値があると読者は・・・？
参加者B：ある程度の情報収集はできますよね。
Interviewer：そのうち雑誌で見る内容とは？
参加者B：いや・・・。なんかちゃんとした情報で、なんというか、ニュースっぽいもの。
Interviewer：ネットにはない、雑誌ならではの？　ライターがいて？
参加者D：若いお客さんで雑誌を見たとか雑誌の記事がという話題になることは？
参加者B：店に来て読むのがほとんど。買っているという話はほとんど聞かない。
参加者D：相対的な地位は落ちてきている。一般でいえば学生自体が活字を読まない。一般学生も雑誌を買っていない。そのあたりからも雑誌を買わないだろうということは容易に・・・。

Interviewer：（質問）クライアントの行動パターンになにか特徴は？たとえばバーのお客さんが一人で来た時の言動、大勢の時の言動、違っていることはあるか？
参加者B：グループで来ると個人的な話ができないのでプライベートで悩んでることが出てこない。一人だと相談事などが出てくる。私も口外しないので。
Interviewer：Dさんの学生の話で「自分は違うけれど」と言うことのプレッシャーと似ている部分があるのでしょうか。
参加者D：セクマイに限らず、グループを越えて会話をすることがないかな、と。　ひとつのグループが隣のグループと話が拡がることは教室では見えない。
参加者A：今は本当にグループ、２つグループがあったら背中を向けている。混ざるということがすごく少なくなっている。　片方がハイに盛り上がっているともう片方がチラ見していることが多い。　前だったらお店の人が話を振ったりしていたけれど、今はついてきてくれない。だから２つの班があって一緒の話題にしようとすると難しい。　たとえば僕がここで話をしている。隣の人は携帯で自分の世界に入っている。話を振っても「は？」という感じ。同じグループなのに。１対１でしか話ができない。　グループに話を振ってもまとまらない。グループを作っていても我が世界にいる。若い世代、２０歳前後の世代はとくにそう。　小学生が友達の家に遊びに行ってもてんでんばらばらなことをやっている。一つのことをやらない。一緒にいるだけ。　その延長かな、と。コミュニケーションのやり方が違うよね。
参加者B：思いますね。グループの中にグループがあったり細分化している。グループ間を移動する人も少ない。
Interviewer：　そうやって出来上がる小さいグループはそれぞれ特徴的？
参加者B：メンバーに共通性があると思う。
参加者A：でも似た者同士な気がする。自分たちの年代からはどのグループも同じに見える。
参加者D：僕は年上が好きで外国人が好きだから、そうなるとグループに入りにくかった。　今は同じ歳で同じようなタイプが固まる。　自分がデビューした頃は老け専バーに行っても今よりも年上の人に相手にしてもらえたのにな、と思う。
参加者A：本当にそう。昔はコミュニケーション、言葉をちゃんと使っていた。
参加者D：いろんなことを教わった気がする。世代を超えて。

参加者A：この人が好きとか嫌いとかいう以前に人間と人間、ゲイバーの中にいても「アンタそれはダメよ」「それはよかったね」とちゃんと言葉にしてコミュニケーションがとれていた。　それが今はない。　自分がバーをやって思ったのが、言うことが干渉と受け止められること。
参加者D：現役のママはどう思う？　年齢とか地域とか混ざっている感じがする？
参加者B：話があまりよくわからない・・・(笑)
参加者A：Bはどっちかと言えば干渉しないタイプ。昔からそう。　あまりぽんと入っていかない。入ったら自分が潰されるから。悪い意味じゃなくて。　だからある程度の間隔をもって中に入らないようにしている。　私は口に出さないと気が済まないタイプだから。
Interviewer：この違いは今のバーと少し前のバーの空気の違い？
参加者A：そうそう。
参加者D：カラオケもかなり迷惑。歌い出されちゃうとアウト。歌う人は歌ってる、歌わない人は無関心。分かれてしまう。
参加者A：カラオケがない時代には店子はしゃべってナンボと言われた。だからカラオケ本とマイクが出てくると「アンタ手抜き」って思う。その前にしゃべりな、と思う。
Interviewer：カラオケの登場というのもメディアのひとつとして影響が大きかった？
参加者A：そうですね。

Interviewer：次の質問。　客はクライアントと接する際に禁忌はある？　クライアント同士も含めて。
参加者A：昔なら政治・宗教・国籍だった。韓国北朝鮮差別などがあったから。僕たちはそう教わった。　今は病気の問題があって、病気のこととかを他人に言うのはベケ。
Interviewer：今は病気のことはタブー？
参加者A：１対１で相談されて話すのはいいけれど、第三者を含めて「あの人はそうだよね」というのは絶対にタブー。
参加者D：お説教はダメ。学校では。　セクシャリティ差別はダメ、コンドームを使わなければダメ、そういう言い方をして学生が説教だ干渉だと受け取ると入っていかない。そういう印象がある。
Interviewer：それは予防啓発の仕事をしている方には気になるところでは？　伝え方の問題として。
参加者A：それは相手による。　普段からコミュニケーションがとれている相手なら踏み込んで話してもいい。でも今日初めて会った人に「こうしなきゃダメ」と言い方をしたらいけない。　相手に合ったしゃべり方というのは必要。
参加者C：ユースの場合は歳が近い者同士という意識があるので、上からものを言うと対等という立場が築けない。言葉遣いに気をつけないとな、と思う。
Interviewer：意思疎通がとれている相手ならば説教もＯＫ。初対面にそれをやると拒絶される。ユースの場合は目線の高さが上がると拒まれる感じがする、と。
参加者D：ユース向けの年齢は？
参加者C：中学高校大学です。僕より若いメンバーは高校生を対象に。年齢が近いということで情報が入っていきやすいという面がある。そういう意味でユースを活かす。
Interviewer：タブーのひとつとして「病気」がＡさんから挙がったが、病気は HIV や STD だけではない。ドラッグで健康被害・依存症が起きたり、またメンタルな面での病気もある。　ゲイであることと関連して複雑な病気がいろいろあると思うが、クライアントさんの病気とタブーの強さの違いはありますか？
参加者A：基本的に病気の話はどの病気も。とくに精神疾患とＨＩＶの問題はとくにタブー。内臓疾患などはけっこう喋れる。潰瘍になったとかガンとか。
Interviewer：Ｂさん、バーで１対１でもあまり出ませんか。病気というのは出てきたりしますか。
参加者B：今までのところはまだＨＩＶの相談はされたことがない。
Interviewer：ほかのＳＴＤやメンタルなことは？
参加者B：精神的なことは聞きます。　心療内科の先生から直接「こんな患者さんがいるので行ってもいいですか」とファックスが来たりとか。
Interviewer：医療者から問い合わせ？
参加者B：私が以前うつになったことがあって、そこの先生から。
参加者A：ゲイバーやってるって知ってるの？
参加者B：もちろん。
Interviewer：そのドクターがゲイバーを有効な場だと認めているということですね。
参加者A：いいことだよね。
Interviewer：ユースはユース同士でどうですか。

参加者C：聞いた話ではそこまでの話はしていないようだ。とくに高校生の場合。　ただ男性同士より女性同士のほうが話をしやすいようだ。　エイズやSTDの話も女性は積極的だが男性は恥ずかしがってしまう。

Interviewer：最後の質問。HIVやSTDの予防についてクライアントから相談されることがあるか。すでに話題に入っていますが。イベントではどうか。

参加者A：毎回来てくれる人は友達同士でHIVやSTIの話をするようになったと聞いた。証拠やデータがあるわけではないが。毎回来てくれる子はコンドームを使わなきゃという意識があがったと、僕とコミュニケーションをとる子は言ってくれる。

Interviewer：クラブが好きで行くうちに啓発に触れて氷が溶けていくのか。

参加者A：そうかも知れませんね。「HIVのこともやりますよ」とフライヤーにも印刷してあるので。

Interviewer：そうするとクラブに行く人が偶然啓発にあたって、だんだん話しやすくなっているのか、それとも元々HIVの話題にあたっても平気という人がクラブイベントに来ているのか・・・。

参加者A：一番最初はそうじゃなかったみたい。HIVって何、みたな感じだったのが、５年前に始めた頃。

Interviewer：そうすると繰り返して行うことで効果が出てきているということですね。

参加者D：クラブイベントにどういう盛り込み方を？

参加者A：ショータイムの間にそういう話をもってくる。最初に呼んだのがドラァグさん、そのドラァグさん（Xさん）とは面識がなかったのですが、僕は別のドラァグさん（Yさん）に憧れていて、YさんがXさんを紹介してくれて。今では二枚看板になっています。

参加者D：うちは授業ですっぴんのXさんを呼びました。でもピンクの絵（ドラァグ姿）は学生がヒイたかな。全体的に。

参加者A：あれは夜だもん。昼間にあれはキツイと思うよ。

参加者D：だから慣れていないと非常に難しい。　すっぴんで普通に話をしてくれた時は、学生も目の前に日本人のHIVの感染者がいる、テレビの中でも外国の話でもなくて、っていうのにはとくに地方の場合は見えないから、いるはずないと思うから、すっぴんで来ていただいて良かった。教員にもいい影響があった。今でも言われることがある。　授業で感じるのは男子学生は全体的に性の話で引く傾向があるということ。マジメにすればするほど。　とくにセクシャルマイノリティの話を「気持ち悪い」とはっきり書いてくるのも男子学生。　授業も男子学生が減ってきているのもわかる。残るのは女子学生。　男子学生にメッセージを届けるのはとても難しい。どうしても男性に自制を迫る内容になってしまう。避妊にしてもSTIにしても。　だからそこが越えにくい壁。そもそも学校で先生に性行為について教わることに拒否感があるというか。もしかしたら教師がやらないほうがいいのかと自分でも思うことがある。　予防啓発は話ができる。でもそれで放り出してしまうことになる。「だから検査を受けなさい」と言っても検査の敷居が高い。回数があるわけではないし。知り合いに会う可能性も高い。地方では匿名なんてことは考えにくい。人数が少ないから。実際ばれるかは別としてそういう恐れを持つ。万一ポジティブだった時にその人を支えるシステムがない気がするから、知識を伝えて放り出すような怖さを感じて「どこまで話をしていいの」と考えてしまう。

Interviewer：啓発知識伝達はできてもアクションを起こしてもらう資源がない敷居が高い、と。

参加者D：サービスがないでしょ。サービスがあればもうちょっと言えるかな、と。

参加者A：僕も予防啓発をやっていて思うのは、ただあぶり出ししているだけじゃないかと。そう感じたことがある。その後の陽性者とわかってからのフォローが。　自分で店をやっていてお客さんに感染を打ち明けられても、その後のフォローがなかなか。うろたえる自分がいてもフォローまでとなるとすごく難しい問題。専門の知識も必要だろうし。

Interviewer：最後の最後。もっとも性感染症に詳しいのはどんな人か。また逆に一番届いていない人は？　そしてその理由は？…　…さきほどクラブイベントによく来てくれる人がよく話すというのは？

参加者A：やはり刷り込みができているというか、詳しいかは別として自分できちんと考えて行動できるようになっているのではないか。　一番困るのがハッテン場で話をしようとして「僕は関係ないから」と言う人。他人事という意識。そこでブロックしてしまう人がいちばん怖い。　本当にその人が知識を持っているかというと大きい疑問。

参加者D：中途半端な情報を持っている人、自分はわかっていると思ってその先を知ろうとしない人が問題。

参加者A：そう、思いこみだけで行動している。

参加者D：いわゆる「まっとうな情報源」、専門書などでなくちょっとしたエロ雑誌の記事や先輩からの口コミを聞いているから自分は知っている、そういう人に一つずつ質問をぶつけてみると意外に違う知識を持っていることがある。高校生とかは？

参加者C：高校生は逆に本の知識がないから「初めて聞きました」と言う。素直に。でもこの前ゲイコミュニティの中で６０人くらいを対象に同じことをやった時、中途半端な知識や間違いが挙がっていた。

参加者D：６０人ってどうやって？
参加者C：忘年会形式で１泊した。その中でエイズ関係で悩んでいる人も多いからということで主催者から講演形式で依頼された。

Interviewer：長時間にわたりありがとうございました。

厚生労働科学研究費補助金 エイズ対策研究事業
ＨＩＶ感染予防個別施策層における予防情報アクセスに関する研究

「介入困難群の予防・保健サービスへのアクセスに関する研究」

介入困難群への職域における介入プログラムの開発

高久　陽介（日本ＨＩＶ陽性者ネットワーク・ジャンププラス）
長谷川博史（日本ＨＩＶ陽性者ネットワーク・ジャンププラス）
長野　耕介（日本ＨＩＶ陽性者ネットワーク・ジャンププラス）

研究要旨

個別施策層の中でも介入困難な層に対しては職域からの介入可能性が考えられる。ただしその際、直接的な働きかけより、ＨＩＶ陽性者を含む、あらゆる個別施策層の存在を前提とした職場全体に対する間接介入が現実的と考えられる。そこでＨＩＶ陽性者の人権啓発と職域における予防介入を目指し、ＨＩＶ陽性者が中心となって実施する共感型のプログラムを開発し、その試行を行った。

当プログラムは、１エイズを知る、２.エイズを感じる、３.エイズを伝える、という三部構造の座学と参加型グループワークの複合プログラムとした。知識の提供を行うと同時にＨＩＶ陽性者の手記の読み聞かせにより、職域においては可視化が困難な介入困難層の存在への気づきと共感を促し、さらには情報発信者の立場に立つことによって、１，２の部分で感じたことを言語化し、リアリティを確認するものとした。

プログラムの試行から陽性者の手記による現実認識とＨＩＶ陽性者への共感は参加者の問題認識を変え、参加者自身が抱え込んでいる MSM や女性、外国人などに対する偏見が軽減する上で効果があることがわかった。

A．研究目的

個別施策層のさまざまな保健行動の阻害要因となっているフェルト・スティグマの低減をはかりつつ、これまで予防施策が到達していなかった介入困難群へのアプローチを行う。職域におけるＨＩＶ感染予防啓発は、その中に存在するＭＳＭ、外国人、青少年など個別施策層をとらえる上で重要であるにもかかわらず、我が国において職域におけるアウトリーチは進んでいない。そこで、企業および労働組合に対しＨＩＶ陽性者の立場から提供できるプログラムの開発を目的とした研究を行った。

B．研究方法

すでに就労しているＨＩＶ陽性者の人権啓発と職域における予防介入を目指し、組合および企業に対してＨＩＶ陽性者の立場から提供する啓発プログラム「職場におけるＨＩＶ／エイズ・ＨＩＶは誰にでも降る雨の一粒」の開発・試行を行った。

活動内容は以下の通り

- 組合における介入可能な場面や協働の可能性の聞き取り。
- 組合の各種研修時に実施可能な啓発プログラムのモデュール開発。
- 組合の幹部に対してワークショップ形式のプログラム試行。

C．研究結果

【プログラム概要】

名称：職域予防啓発プログラム

目的：　職場における人権教育および安全衛生教育の一環として、ＨＩＶ感染症およびＨＩＶ陽性者に対する全般的理解の促進と予防意識の向上をめざす。

対象：　就労している一般成人（１８歳以上の男女）

形態：　職域において実施可能な枠組（人数、時間、予算等）に応じて、スライドによるプレゼンテーション、講演、陽性者手記の読み聞かせ、グループワーク

等の手法を組み合わせて実施する。

時間：　下記のCell１から４の組み合わせによる。６０分から１８０分を想定

内容：

Cell 1　ＨＩＶ／エイズを知る

目的	●日本のＨＩＶ/エイズの実情を要約してコンパクトに伝える。 ●参加者の知識格差を是正する。（プログラム参加の準備）
実施時間	２０分
形式	パワーポイント資料によるプレゼンテーション
内容	●日本におけるＨＩＶ感染症の流行 ●ＨＩＶ/エイズとはどんな病気か（病態、治療、福祉制度、他） ●セクシュアルヘルス（感染のメカニズム、予防方法、検査、他） ●私たちの問題としてのＨＩＶ/エイズ（偏見と差別、人権、Living Together）
実施者	ジャンププラスにおいてこのプログラム実施者のトレーニングを行い、修了しスピーカー派遣事務局によって認定されたプレゼンテーターが行う。
備考	医学的、専門的な質問は受けない（プレゼンターの限界）旨をはじめに伝える。また、学習資料としてエイズに関する基礎知識、予防法を含むパンフレットを必ず配布する

Cell 2　ＨＩＶ陽性者に聞く

目的	●ＨＩＶ陽性者の存在を通じてＨＩＶ/エイズがすでにすべての人の問題であることを感じてもらう（Living Together の理念）。 ●参加者にエイズやＨＩＶ陽性者の現実的なイメージを伝える。 ●ＨＩＶ陽性者の困難を共感的に理解し、職場での差別や偏見をなくすことに貢献する。 ●ＨＩＶ/エイズの問題を考えることで、よりよい就労環境の実現に貢献する。
実施時間	３０分～５０分（質疑応答の時間１０分を除く）
形式	ＨＩＶ陽性者スピーカーによる語りと傾聴
内容	●内容はスピーカーおよび参加者（聴衆）の特性に応じてジャンププラススピーカー派遣コーディネーターが調整。 ●タイトルは個別に対応。 ※講演内容はスピーカーおよび参加者（聴衆）によって異なる。
実施者	ジャンププラスＨＩＶ陽性者スピーカー。

Cell 3　ＨＩＶ／エイズを感じる

目的	●手記を参加者が読み聞かせすることによって、ＨＩＶ陽性者への共感的理解を促す。 ●ＨＩＶ/エイズ問題を観念的に理解するのではなく、追体験によって自分とＨＩＶの関連性にリアリティを与える。
実施時間	３０分（リーディングとコメントで１人あたり１０分前後）
形式	ＨＩＶ陽性者の手記のリーディングとコメント発表
内容	●参加者の中から事前に３名の読み手を選出し、予めジャンププラスが選定したＨＩＶ陽性者の手記を参加者が読み、続いて感想などコメントを発表する。
実施者	ジャンププラスのコーディネーターと主催者が事前に打ち合わせを行い、参加者から選出またはジャンププラスから派遣するファシリテーターが進行する。

Cell 4 ＨＩＶ／エイズを伝える

目的	●ＨＩＶ/エイズ問題を伝える側に立つことで、ＨＩＶ/エイズ問題を客観的にとらえる。 ●少人数のグループワークを通して、ＨＩＶ/エイズの問題の多面性、多様性を実感する。 ●職場における情報発信能力を高める。
実施時間	２０分～５０分
形式	少人数（５～８名）によるグループワーク
内容	名称：ポスタープロジェクト 内容：職場におけるＨＩＶ啓発、感染予防に関するポスターを少人数で制作する。キャッチコピー（文案）とビジュアルを考える。
実施者	ジャンププラスのコーディネーターと主催者が事前に打ち合わせを行い、参加者から選出またはジャンププラスから派遣するファシリテーターが進行する。

D．結論と課題

職域においてはMSMやHIV陽性者といった存在は可視化されず、HIV／エイズに対する意識や関心も極めて低い。このような状況において個別施策層として位置づけられる社会的基盤の脆弱な人々は周囲の偏見や差別意識を自分も抱え込んで予防情報や保健サービスへのアクセスを忌避している可能性が考えられる。そこで、彼らの同僚の意識変化や、職場での理解を進めるという介入は間接的ではあるが、彼らのHIV／エイズへの態度変化を促す。

また、HIV陽性者の手記を活用することで、現状や対象層に合わせたプログラム構成が可能で多様な対象、多様な状況に対応することができる。

今後は、労働組合や企業の人事部等への広報活動により、職域予防啓発プログラムの周知を行う。また、同プログラムは職域以外にも応用展開することが可能であると考えており、少ないリソースで効率よく介入機会の拡大につなげていく必要がある。

そこで次年度以降はさらに、職場と同様に大学、地域社会といった介入困難な人々の存在が想定される場面にプログラムの試行、導入を進めていく。

平成２０年度　厚生労働科学研究費補助金　エイズ対策研究事業
ＨＩＶ感染予防個別施策層における予防情報アクセスに関する研究
研究報告書

発　行　日　平成２１年３月
発　行　者　主任研究者　服部 健司

371－8511 群馬県前橋市昭和町3－39－22
群馬大学大学院医学系研究科社会環境医療学講座医学哲学・倫理学分野
電話／ファクス　027－220－8037